

## 愛知県国府宮の夜儺追神事

Yonaoi-Shinji of Konomiya Shrine in Aichi Prefecture

藤原 喜美子\*

Kimiko Fujiwara

愛知県稲沢市の国府宮では、旧暦正月十三日～十四日に儺追神事・夜儺追神事がある。夜儺追神事で儺負人（神男）は天下の災厄（儺）が込められた土餅を背負わされ、神社から追い出される。そして、土餅が地中に埋められることで世の中の平穏無事が保たれてきたという。神事を中心ともいうべき神男は、夜儺追神事（修正会）が追儺の行事になってしまった時点で、儺（土餅）を背負わされ追放される存在（儺負人）になった。

キーワード：神男、夜儺追神事、追儺、儺負人

### I. はじめに

愛知県稲沢市国府宮にある尾張大國霊神社（以下、国府宮と記す）では毎年、旧暦正月十三日～十四日にかけて「儺追神事」「夜儺追神事」がおこなわれている。この神事では「儺負人または神男と称される役」が選ば<sup>ちようや</sup>れる。そして、真夜中に<sup>ちようや</sup>斥舎でおこなわれる「夜儺追神事」の中で、儺負人（神男）は重要な役割を担わされる。それというのも、夜儺追神事で儺負人（神男）は天下の災厄が込められたとされる「土餅」を背負い、国府宮から出て行かなければならないからである。そして背負った土餅は路傍で投げ出され、速やかに土餅が土中に埋められた。

この夜儺追神事について、『新修 稲沢市史』本文編上<sup>1)</sup>は次のように説明している。

一切の神事がすむと、儺負人は土餅と大形代を背負わされ、それにつけた紙燭に火をつけて追出される。このとき、一同は小形代を儺負人に投げつける。儺負人を一里四方の外まで神主以下社人たちは抜刀して追い立てていく。儺負人は遂には路傍に倒れ、土餅や大形代が地上に投げ出されると、直ちに一行はその土地を掘ってこれを埋めるのである。土餅、大形代に依りつけられたこの世の災厄を一切土中に返して、清浄平穏な世界がこれで現出するのである。

とあり、土餅と大形代を背負った儺負人が荒々しく追い出され、遂には儺負人が路傍に倒れると、そのところを掘って直ちに土餅は埋められているのである。こうすることによって、世の中の平

穂無事が保たれていたという。したがって、国府宮では、天下の災厄が込められた土餅を背負うという大変な役割を担うのが儼負人（神男）なのである。

一方、『塩尻拾遺』<sup>2)</sup>には、次のように記されている。

我が尾州、国府宮儼追、他処には無き事のやうに人々思へり。古へ鎮西の方、処々行<sub>レ</sub>之し。前に記<sub>レ</sub>之。又播磨国八徳山、刀田山、法華山、大山、清水寺等、今に至りて鬼走をなせり。但し人を捉へて鬼とする事は、諸州今なし。其の所の民に料を与へて務めしむ。此の中八徳山は広峰の牛頭天王にして、疫を攘ふ根本のやうに聞ゆ。凡そ鬼走りは、追儼より出て、陰陽家の行事なるを、仏事に習合し、後は神家の故実のごとくなれり。故に其の趣も違ひ附会の説造りて、本拠もなき事のやうになれるところ多し。

尾州「国府宮儼追」のことを紹介してから、播磨国八徳山などでは「鬼走」がおこなわれていると記している。私はこれまで兵庫県（播磨国）の八徳山八葉寺の「修正会・鬼追い」のオニについて検討してきた<sup>3)</sup>。八徳山八葉寺では正月七日に「修正会・鬼追い」がおこなわれてきた。まず修正会の法要が僧侶によって修された。それから僧侶による「鬼の呼び出しの作法」がおこなわれて初めて、「仏の化身」と伝えられるオニ（赤鬼・青鬼）は本堂の内陣へと姿を現すことができた。そして、オニは松明を持ち、地を力強く踏み鎮めた。このように八葉寺の鬼追いでは、オニが災いを祓ったのである。

先に紹介した『塩尻拾遺』によれば、「国府宮儼追」のことを紹介するのに、わざわざ播磨国（八徳山など）の鬼走りのことが述べられている。なぜ『塩尻拾遺』（江戸時代中期頃）は、国府宮の儼追を考えるのに、播磨国の鬼追いと比較して記したのであろうか。

そこで、本稿では国府宮の「儼追神事・夜儼追神事」を取り上げ、神事における儼負人（神男）の意味をもとめていきたいと思う。

## II. 国府宮の儼追神事・夜儼追神事

### 1. 儼追神事（はだか祭）

愛知県稲沢市の国府宮の「儼追神事」は、旧暦正月二日「儼追神事標柱建式」「儼負人（神男）選定式」に始まり、旧暦正月十三日に「儼追神事（はだか祭）」、旧暦正月十四日に「夜儼追神事」があり、旧暦正月十七日「的射神事」で終わりを迎える<sup>4)</sup>。そこで、国府宮の「儼追神事（はだか祭）」や「夜儼追神事」とはどのような行事であるのか、国府宮で伺った話をもとに紹介したい（平成22年9月調査）。

旧暦正月十三日の儼追神事（はだか祭）に先だち、旧暦正月十二日（平成23年は2月14日）に「大鏡餅奉納」がおこなわれる。この日は奉賛会によるパレードが国府宮まで賑やかに繰り広げられ、巨大な大鏡餅（直径2.4m、50俵の餅米を使用）が盛大に奉納されている（写真1・2・3）。大神餅を奉納する奉賛会は、毎年違う地域がその役割を担っている<sup>5)</sup>。この大鏡餅以外に、

近隣の諸地域からも小餅（鏡餅）が次々に奉納されるため、国府宮の拝殿は奉納された多数の鏡餅で埋めつくされる（写真4）。また、午後7時頃から「庁舎神事」があり、国府宮の神職・神男・鉄鉾会がそろって庁舎へ向かい、神事をおこなう（写真5）。



写真1 盛大に運ばれる大鏡餅  
(2011年2月14日撮影)



写真2 大鏡餅（2011年2月14日撮影）



写真3 奉賛会の力を合わせて奉納する  
大鏡餅（2011年2月14日撮影）



写真4 近隣の諸地域から奉納される鏡餅  
(2011年2月14日撮影)



写真5 庁舎神事へ向かう鉄鉾会の人々  
(2011年2月14日撮影)

続いて、旧暦正月十三日（平成23年は2月15日）の午後3時頃からは、国府宮で儺追神事（はだか祭）がおこなわれる。現在、儺追神事といえば、一般的に昼間（旧暦正月十三日午後）の儺追神事が人々に知られている。まわし一本（ふんどし姿）の裸男が大勢、赤色や水色の奉納布をつけた「なおい笹」を持って次々と国府宮の境内へ集まり、なおい笹を国府宮へ奉納する<sup>6)</sup>（写真6）。こうして、国府宮の境内やその周辺は、儺追神事に参加する大勢の裸男の群衆に埋めつくされる。



写真6 奉納布をつけた「なおい笹」  
（2011年2月15日撮影）

ところで、儺追神事に参加する裸男たちは、神男に触れると自らの災厄が赦えると信じられているという。そのため、昼間の儺追神事では、神男が大勢の裸男たちの中に出た途端、神男のもとへと一生懸命に近付こうとする。そこで激しい押し合いが始まり、神男を中心とした大きな渦ができる。そして、神男と大勢の裸男たちによる激しい揉み合いの結果、ついには神男が儺追殿（本殿に向かって右側）の建物に納まり、ようやく昼間の儺追神事は終了する。

すると、旧暦正月十三日におこなわれる儺追神事では、裸男たちの群集の中心にいたのが「神男」であった。そして、神男とは大勢の人々から、ほんの僅かでも側に近付きたいと願われる存在であった。

ところが、国府宮の「儺追神事」では本来、儺追神事後で真夜中に執りおこなわれる「夜儺追神事」が重要であるといわれる。そこで、神男（儺負人）の動きに気をつけながら、次に夜儺追神事の様子を紹介したい。

## 2. 夜儺追神事

国府宮の「夜儺追神事」は、旧暦正月十四日（平成23年は2月16日）の午前3時頃、庁舎（国府宮境内の東南）でおこなわれている（写真7）。この夜儺追神事について、『「国府宮裸まつり」構成の持続と変化』<sup>7)</sup>には、

夜儺追神事に先だって、儺追殿では白衣の神男と鉄鉾会員達が甘酒で盃を交わす。そして二人の鉄鉾会員に両脇を支えられて草履バキで拝殿前にいたる。そこで、本殿にいる神職と共に拝礼をし、神職六名、神男、鉄鉾会員は、庁舎に向う。庁舎では、神職は全員庁舎内拝所に着座するが、神男は庁舎の神前と拝所の間の通路の東側の入口に外向きに座る。神事は修祓、司宮神開扉、招神、献饌、祝詞と進む。この神事では、再び一宮はじめ四柱の神々を招き、天下泰平・五穀豊饒・悪疫退散を祈願する。これが一千二百有余年の間伝承されているといわれる夜儺追神事である。

と記され、庁舎でおこなわれる夜儺追神事では、一宮をはじめ四柱の神々を招き、天下泰平・五穀豊穰・悪疫退散が祈願されている。そして、このことが祈願された後、天下の災厄が込められた土餅（儺）を神男が背負わされることになる。

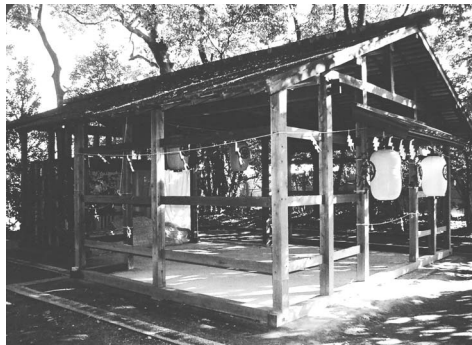


写真7 夜儺追神事の行われる庁舎  
(2011年2月16日撮影)

国府宮で伺った話（平成22年9月調査）によると、夜儺追神事では神職による神事が執りおこなわれた後、鉄鉾役（禰宜）が大鳴鈴を振り鳴らして庁舎を3周まわる。その後、土餅を背負った儺負人（神男）が先に立ち、それに続いて鉄鉾役が庁舎をさらに3周まわる。最後には儺負人（神男）の背負う土餅に向けて、参拝者が桃と柳を一組にして紙に包んだ礫を投げる。

儺負人（神男）に投げられた礫は集めて焼かれ、その灰は翌年まで置いておき、翌年の土餅を作る時に餅の中に混ぜる。そして、餅の表面にもその灰を真っ黒に塗る。これを灰餅や儺追餅などともいう。この土餅を準備するのは神社側（宮司・禰宜）である（旧暦正月十一日早朝）。礫の灰は翌年の儺追神事まで置くことに注意させられる。

以上のように、国府宮の夜儺追神事では、儺負人（神男）は土餅と人形を背負わされ、神社から追い出される必要があった。その土餅というのが、「はじめに」で紹介したように、天下の災厄を搗きこんだとされる恐ろしい餅であった。そのため、地面に落ちた土餅は速やかに土中に埋められる必要があった。人々の平穏は土餅を地面に封じるといふ行為によって守られてきたのであ

る。

そうすると、災厄が込められたとされる土餅であるがゆえに、土餅を運ぶ役目こそ、十分に選ばれる必要があったと推測される。そのような重責を担わされたのが、儼負人または神男などと称される存在であった。『「国府宮裸まつり」構成の持続と変化』<sup>8)</sup>には、「神男は両脇を抱えられている鉄鉾会員とともに、足を引きずりながら闇に消えてゆく。神男の後を決して追ってはならないといわれている」と記されている。天下の災厄が込められたという土餅の行方を追いかけてはならないのである。

それでは国府宮の夜儼追神事において、土餅を背負う役目を担わされる「儼負人または神男」とはどのような存在であるのか、さらに見てみたい。

### Ⅲ. 儼負人（神男）の役目

国府宮の儼追神事や夜儼追神事では、「儼（災い・厄）を追い払うこと」が目的とされてきた。そして、大勢の人々の儼を背負わされることになるのが「儼負人（神男）」であった。儼負人は時代によってその呼称が異なり、現在では「神男」ともよばれている。この神男を守るために「鉄鉾会」（かつて神男をつとめた人々の会）が組織されている。そこで、神男について、鉄鉾会会長の大野氏（昭和49年に神男をつとめられた、平成22年9月調査・平成23年2月調査）から伺った話をもとに紹介していきたい。

#### 1. 神男の選定式

神男は選定式（旧暦正月二日）によって選ばれている。立候補者の中でくじ引きをおこない、1人（一番くじ）が選ばれる。神男の選定はご神意によるものである。神男を出す家などは特に決まっていない。儼追神事（はだか祭）は命がけになるので、現在は立候補するにも鉄鉾会会員の推薦が必要であるという。神男に選ばれると、その日から神男になるための精進をおこない、儼追神事を迎える<sup>9)</sup>。

#### 2. 神男の参籠（お籠もり）

儼追神事の3日前になると、神男は国府宮へ参る。これを神社では参籠といい、地域の人はお籠もりとっている。このように参籠（お籠もり）することによって、儼追神事当日までの3日間、儼追殿（本殿横の建物）の中で寝泊りをして籠もる。いったん神社へ参籠すると、神男は神社から決して出ず、自宅にも帰らない。

神男にはお付きの人が2名（前年の神男・前々年の神男）いて、参籠の期間中に神男になるための作法や心構え、儼追神事の時の自分の身の護り方などを神男に教える。儼追殿での神男の食事は、白ご飯、たくあん、白湯のみである。お付きの人が神男の食事の準備をする。包丁は使っ

てはいけない。神男が食事に使うお膳や飯櫃には注連縄がはってある。儺追殿の神前で、神男は神に背を向けて座って食事をする（写真 8）。また、神男はお籠もりの 2 日目に「力餅」を搗く。これは本殿と儺追殿に供えられる餅である。一方、儺追神事が終わるまで、神男の家族は家の神棚の前で無事を祈り続け、神社にもお参りしていない。

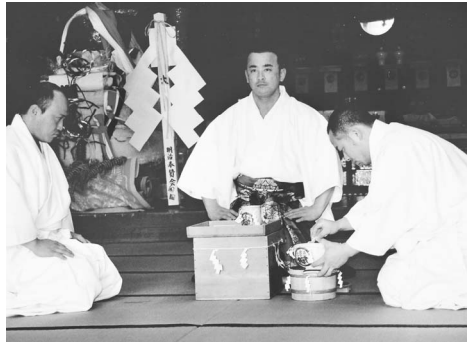


写真 8 儺追殿に参籠中の神男  
(2011 年 2 月 15 日撮影)

### 3. 神男による参拝者へのお加持

国府宮では儺追神事の期間中、大勢の人々が厄除け祈願をするために国府宮へ参拝する。神男が参籠（お籠もり）している時、神男による人々へのお加持が儺追殿でおこなわれる（写真 9）。お加持では、お参りした人々が頭のあたりを御幣ではらってもら。大勢の参拝者が神男にお加持をしていただく長い行列を作る（お加持には約 2 万人の参拝があるという）。神男にお加持をしていただき、罪や穢れをはらってもらい願うのではないかと<sup>10)</sup>。

また、参拝した大勢の人々は、厄除けのお守りとして紅白の「なおいぎれ」を求めて帰る。この「なおいぎれ」は、儺追神事に神男が裂いて災難除けを祈願した布切れであるという。殊に夜儺追神事（旧暦正月十四日）が済んだ後は、国府宮の境内で神男と対面する機会がある。それで朝から参拝者が境内で長蛇の列を作る。神男に会う順番がまわってくると、参拝者は自分の手を差し出して神男にしっかりと握ってもらい、一年間の厄除けのお守りとなる「なおいぎれ」にも触れてもらう。こうして参拝者は、神男に対して厄除けのご利益を求めるのである（写真 10）。一方、国府宮の楼門の前に建てられている標柱（「儺追神事」・その年の年月日が墨書された木製の柱）にまで、参拝者がご利益を求める姿も見られる。楼門前の標柱を参拝者は自分の手で触ったり、買い求めた「なおいぎれ」で標柱を触ったりするのである（写真 11）。



写真9 神男にお加持をしてもらう参拝者  
(2011年2月15日撮影)



写真10 神男に厄除けを願う参拝者  
(2011年2月16日撮影)



写真11 標柱に触れて帰る参拝者  
(2011年2月16日撮影)

#### 4. 儼追神事（はだか祭）

旧暦正月十三日午後3時頃になると、神男をはじめ、鉄鉦会の人々が儼追殿の神前で一座する（写真12）。それから、本殿前で神事（神職・神男・鉄鉦会の方々が参列）が厳粛に執りおこなわれる。本殿前の神事では、最後に禰宜が鉄鉦（大柵）を手にして神前から持ち出し、鉄鉦によって神職や神男・鉄鉦会会員を祓う。この鉄鉦には秘符・大鳴鈴が結び付けられている。

本殿前の神事が済むと、大勢の裸男の待つ参道へと神男が向かう。どの場所から神男が出るかはわからない。一方、拝殿では鉄鉦役（禰宜）が鉄鉦を持って立ち、正面（神男）を絶えず見守り続ける（写真13・14）。そして、神男が楼門から境内に入って儼追殿におさまるまでの間は、鉄鉦役（禰宜）が拝殿の先まで出て、手にした鉄鉦（大鳴鈴）を常に振り続ける。伺った話によると、神男は鉄鉦とともにあるという（平成23年2月15日調査）。

大勢の群衆の中心（大きな渦）の中では、神男は自分の意思では全く動けない状態となる。というのも、神男に触れることを願い、手探りの状態で裸男の群衆が四方八方から押し寄せてくる



からである（写真 15）。それほどの群衆が相手となるため、神男の周囲には常に人（鉄鉾会）がいて、神男を護り続ける。

かつて裸男として参加した方に伺った話によると、実際には神男に近付くことも難しく、神男に触れることはさらに難しい。それでも、一般の参拝者からは、裸男に対して「なおいぎれ」に触れてもらいたいとの希望があるという。すると、儺追神事（はだか祭）に参加した裸男にまで厄除けのご利益があると地域の人々には考えられていることになる。その信仰の中心にいるのが神男であった。



写真 12 儺追神事の前に儺追殿で一座する  
神男・鉄鉾会（2011年2月15日撮影）



写真 13 鉄鉾（2011年2月15日撮影）



写真 14 鉄鉾に結び付けられた秘符・  
大鳴鈴（2011年2月15日撮影）



写真 15 儺追神事（はだか祭）  
（2011年2月15日撮影）

## 5. 夜儺追神事

続いて真夜中（旧暦正月十四日午前3時頃）になると、「夜儺追神事」が庁舎で執りおこなわれる。昼間の儺追神事で神男は多少の怪我をすることもあり、基本的には身体が疲れきって1人で立てない状態となる。そのため、神男はお付きの鉄鉾会員（前年の神男・前々年の神男）に両脇を抱えられた状態で儺追殿を出て、夜儺追神事の間となる庁舎へと向かう。

夜儺追神事では、神職による神事がおこなわれる。この時、神男は庁舎の東側で外向きに座り、土餅はまだ背負わされていない。庁舎で神事がおこなわれ、神職による祝詞奏上などが済むと、神男の背に土餅（天下の災厄が込められた儺）が背負わされる（写真 16・17）。そして、土餅には人形や紙燭を取り付ける。この状態で外向きに座ったままの儺負人（神男）の頭上で、神職が司宮神の木箱を3回まわす。一方、周囲にいる参拝者には、礫（桃と柳を束ねて半紙に包んだもの）が配られる（写真 18）。この時、鉄鉦会の人々が箸で礫をはさんで参拝者に礫を渡す。



写真 16 天下の災厄を込めた土餅  
(2011年2月16日撮影)



写真 17 儺を負わせる  
(2011年2月16日撮影)



写真 18 礫の用意 (2011年2月16日撮影)



写真 19 大鳴鈴を鳴らして庁舎をまわる  
鉄鉦役 (2011年2月16日撮影)

紙燭には火がつけられ、儺負人（神男）は鉄鉦会員（前年の神男・前々年の神男）に両脇を抱えられた状態で、庁舎の東側に立ちあがったままである。そして、まずは鉄鉦役（禰宜）が大鳴鈴を鳴らして庁舎をまわり始める（写真 19）。この時、鉄鉦役は「オー」と声を出し、右手に持つ大鳴鈴を鳴らし続けながら庁舎を3周する。鉄鉦役が4周目を迎える時、土餅を背負わされた儺負人（神男）が両脇を抱えられた状態で先に庁舎をまわり始める（写真 20）。その儺負人（神男）のすぐ後ろに鉄鉦役が続き、この時も鉄鉦役は「オー」と言いながら、大鳴鈴を振り鳴らし

続けてまわる。こうして難負人（神男）と鉄鉾役（禰宜）は、庁舎をあと3周まわる。そして、最後の周（6周目）をまわる時、難負人（神男）の背負う土餅に向けて参拝者は礫を投げる。もちろん、投げた後の礫は決して拾ったり踏んだりしてはならない。地面に落ちている礫は速やかに集められ、その場で焼いて灰にしてしまう。礫の灰は司宮神のところに納められ、翌年の土餅の中に混ぜるのだという（平成23年2月16日調査）。

こうして、難負人（神男）は人々の罪や穢れを一手に受け、国府宮から追い出されることになる。国府宮を出た後、難負人（神男）は途中で土餅を投げ出し、自分の家に帰るまでは決して話をしてはならないという。しゃべると土餅に込められた罪や穢れを難負人が受けてしまうといわれる。鉄鉾会会長の大野氏に伺った話によると、夜難追神事で神男は難を背負う状態（難負人）になるので、夜難追神事の時には難負人（神男）に触れないようにしてもらっているとのことであった。

そうすると、庁舎での夜難追神事において、天下の災厄が込められた土餅（難を象徴したもの）を神男が背負わされた時点で神男と呼ばれる存在ではなくなり、難を背負わされた難負人になったものと考えられる。



写真 20 土餅を背負って庁舎をまわる  
難負人（2011年2月16日撮影）

#### IV. 地誌にみる難負人の姿

##### 1. 難負人

災厄を搗きこんだとされる土餅を背負わされる難負人は、抜き身の刀で国府宮から追放されたことが地誌には記されている。そのため、難負人になることを人々は必死で拒否した時代があった。

「元禄十一歳戊寅（1698）正月十三日難負者土餅歳々留帳 中嶋郡国府宮神主扣」<sup>11)</sup>には、元禄年間に難負者として選ばれた人名や年齢が記されている。その中で、「元禄十四年辛巳正月十三日難負人足」によれば、

- 一、海東郡勝幡村二而、所左衛門と申者取ル、此者役相勤申候
- 一、海東郡丹波村二而、傳右衛門と申者取ル、是ハ勝幡村者共、寄進者二手おせ申候二而、所左衛門ニ役相勤させ、傳右衛門ハゆるし申候
- 一、土餅遣し申候所ハ、海東郡方領村江追り申候（中略）
- 一、右勝幡村儺追ニ付、石橋村之者、柴山重太夫方へ被頼、難負取申節、勝幡之村より三人程刀ぬき罷出、石橋村之半六と申者之左之ひたいと、かたさきをきられ申候ニ付、かんにん不罷成、重太夫と私、井社家中共ニ、目やす一通二而奉願候、（後略）

とあり、元禄十四年（1701）正月十三日の儺追では、儺負人になることを必死で逃れようとしている。場合によっては刀で傷つけられる恐れがあった様子が窺える。

『張州府志』（宝暦2年（1752））<sup>12)</sup>によると、

毎歳正月十三日味爽。神主入<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>宮中<sub>ニ</sub>。携<sub>レ</sub>出<sub>ル</sub>大鈴<sub>ヲ</sub>。所<sub>レ</sub>謂<sub>ル</sub>大鳴之鈴。著<sub>レ</sub>結鐵鉞<sub>ヲ</sub>。此間供僧書<sub>レ</sub>秘符<sub>ヲ</sub>。祠官某取<sub>レ</sub>鐵鉞<sub>ヲ</sub>出<sub>ル</sub>神門<sub>ニ</sub>。行<sub>ク</sub>向<sub>テ</sub>其年歳徳之方<sub>ニ</sub>。而<sub>モ</sub>竟<sub>テ</sub>路人到来<sub>ス</sub>。既<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>就捉人<sub>ヲ</sub>而歸<sub>ス</sub>。置<sub>ク</sub>諸神宮寺<sub>ニ</sub>。（中略）先<sub>ニ</sub>是使<sub>テ</sub>就捉人負<sub>テ</sub>土餅及芻靈<sub>ヲ</sub>。以<sub>テ</sub>紙燭二箇<sub>ヲ</sub>著<sub>テ</sub>芻靈<sub>ニ</sub>。其際次第繁多。不<sub>レ</sub>遑<sub>テ</sub>羅縷<sub>ス</sub>。爾後神人大追<sub>レ</sub>之。事了以下所<sub>レ</sub>擲擊<sub>ル</sub>之小芻靈<sub>ヲ</sub>聚<sub>テ</sub>爲<sub>ス</sub>一堆<sub>ニ</sub>。於<sub>テ</sub>政所巽隅<sub>ニ</sub>燒<sub>レ</sub>之。固封藏<sub>レ</sub>之。即<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>此灰<sub>ヲ</sub>和<sub>テ</sub>糯米<sub>ヲ</sub>擣<sub>レ</sub>之。調<sub>テ</sub>来年土餅<sub>ニ</sub>也。且其儺人被<sub>レ</sub>追轉倒地。埋<sub>テ</sub>其土餅<sub>ヲ</sub>。惣社近境其跡多在<sub>レ</sub>之。謹按。儺負。或以<sub>テ</sub>爲<sub>ス</sub>追儺之遺風<sub>ニ</sub>非也。是真言僧所<sub>レ</sub>修吉祥悔過之法也。（後略）

とあり、捉えた儺人に土餅を背負わせ、その儺人が追われて転倒した地に土餅が埋められている。

『張州府志』（宝暦2年（1752））には、すでに土餅には灰が混ぜられていたこともわかる。さらに『張州府志』で注意させられることは、正月十三日におこなわれたこの神事が「追儺の遺風」ではなく、真言僧の修す「吉祥悔過之法」であると記されていることである。すると、18世紀中頃では、天下の災厄を追い払う行事ではあったものの、それがもとは真言僧の修す「吉祥悔過之法」（正月の仏事）であったと考えられていたことが読みとれる。

この国府宮の儺追神事について、『張州年中行事鈔』（明和6年（1769））の「正月十三日」の項<sup>13)</sup>には、

此祭正月月中旬、道路の旅人を捕へ、潔斎させて祭の夜土餅を負せ、髻に燭を燈て、神前を追廻し、一里の男女神官の下知を請て是を追逐す。是国家の為に邪気を追ふなるべし。初春の神事儺負十二日より十七日に至る。此外社秘有べし。此祭なをひと云事は儺追の字の心にや。（後略）

と記され、正月月中旬に道路の旅人を捕えて潔斎させ、祭の夜に土餅を負わせた様子が記されている。捕えられた旅人は、儺を負うという重責を背負うことになる。したがって、『張州年中行事鈔』の記された頃にも儺負人と考えられていた。それでも、これが初春の神事として、国家の邪気を追い払うために正月におこなわれ続けていたのである。

## 2. 「吉祥悔過の祭」としての難追神事

さらに、『尾張名所図会』後編卷之二（前編天保15年（1845）刊・後編明治13年（1880）刊）をばりおほくにたまのかみのやしろ  
 「尾張大国霊神社」<sup>14)</sup>の項には、  
 難負神事なおひのしんじ（同（正月）十三日。俗に難追祭なやらひまつりといふ。『年中行事故実考』に、当国国府宮に難負神事あり。これは吉祥悔過の祭にて、上古国分寺にて行はれしなり。行路の人を捕へ、それに一国の厄を負はせて追ひ払ふ。追難の儀なり。今も勢州白子の観音寺にてこれを行ふ。また和州長谷寺にては、二月修正の法を修す。当国熱田の神宮寺にて、正月五日修正を行ひ、鬼を追ふこれなり。俗説に難負祭を人みごくのやうにいひ伝へ、咎なき村民をとらへて用ふるは、後世の誤りなり。国府宮の庁に用ふる尊像は、唐画の吉祥天女なり。社家の輩は稲田姫の像といふと見えたり。

と記され、正月十三日に国府宮でおこなわれる「難負神事」<sup>(ママ)</sup>は上古、修正会としての「吉祥悔過の祭」であったとしている。やがてそれが行路の人を捕え、その人に一国の厄を負わせて追ひ払う追難の儀になっていったという。したがって、『尾張名所図会』の記された19世紀頃には一方で、「難負神事」はもとは「吉祥悔過の祭」であったという理解が記され続けているのである。そして、『尾張名所図会』には、

同（正月）十三日秘符認神事ひふしたためのしんじあり。これは神主・社僧神前に出仕、大宮大床にて神号の秘符を認め勸請し、白杖に櫛さかき・注連しめ・節刀せつとう・大鳴鈴おほなり並びに右秘符を結び添へ、難負捕に出づる節せんだつ、先達の祠官これを持ち行くなり。同日辰刻、国君より御名代参宮あり。午刻難負捕に出づる社輩の面々、鍵さや・長刀の鞘をはづし、注連を付けたるを従者に持たせ、捕人を引連れ、一統神前に揃ひ、発向するに先づ楼門において首途の祝ひとて、一統一夜酒ひとよざけを頂戴し、節刀・大鳴鈴・秘符を守護し、その年の兄方えほうをさして、捕人の者白刃を振立て、我先にと発向す。神主・社僧は楼門まで送迎の式あり。それより難負人〈古へは行路の旅人を捕ふる事なりしが、寛保四年甲子正月国君よりこの事を禁止し給ひ、今はかたばかりに人を雇ひて備ふる事となりぬ〉を捕へ連れ帰り、難負殿へ入れ置き、同夜丑刻に至つて七度半の使にて神事始まる。神主・社僧政所へ出仕、神主は吉祥天女の像を供奉し、政所黒木の神殿において神供を献じ、神主祝詞をよむ。社僧両寺は国内神名帳を読み上ぐる。祠官おさの長、大宮の殿上より白紙祝詞を持ち、白洲しらすに下り、宮福太夫みやふくたいふに渡す。それより宮福太夫心中に読み終つて後、拜殿にて翁舞あり。終りて政所に移る。難負人には垢離こりをいたさせ、翁舞のうち拜殿に出だし置き、翁終りて共に政所へうつし、吉祥天女の神前において、また宮福太夫翁しそくを舞ふ。終りて見物人を払ひ、難負人の髪を直し、土餅・人形を負ふせ、人形の手かしらに紙燭をもたせ、難負人の頭かしらにも紙燭をさし、祠官及び長追の人々、白刃を振立て草人形を投げ撃ち、節刀・大鳴鈴はらをもつて追ひ払ふ事、神秘さまざまあり。（後略）

と記されている。難負捕の人々は白刃を振立て、捕らえた難負人を「難負殿」に入れたとある。

それでは、この難負殿とはどのような場所であったのであろうか。『尾張名所図会』には「大日堂なおひどう 難追堂ともいひて、真言宗、長野村万徳寺の末寺なり。これ当社の神宮寺なり（後略）」と記されており、国府宮の神宮寺であった大日堂（難追堂）に難負人は入れられたことがわかる<sup>15)</sup>。国府宮の難負神事に神宮寺が関わっていたのである。そして、神主・社僧は政所へ出仕し、神主は吉祥天女の像を供奉し、社僧両寺は国内神名帳を読み上げたとある。

また、神事のおこなわれた政所について、『尾張名所図会』によると「政所まんどころ（本社の東南の方にあり、東西二十六間、南北八間の大殿なり。正月十三日の神事・五月六日の祭事等、この殿にて執り行ふ）」とある。正月十三日の神事は政所（現在の庁舎）で執り行われる神事であった<sup>16)</sup>。そして今なお、夜難追神事は庁舎（かつての政所）で引き継がれているのである。難負人には垢離をさせ、土餅と紙燭を持つ人形を背負わせ、自身の頭に紙燭をさすという異形の姿であった。その姿が「夜難追の神事」の絵にも描かれている。しかも、それを祠官及び長追の人々が、「白刃を振立て草人形を投げ撃ち」さらに節刀・大鳴鈴（神宝）をもって難負人は追い払われていることに注意させられる。白刃を振り立てて難負人を追っていることから、いかに人々が真剣に難追をしていたかが推測される。

ここに、路傍の人は旅人であっても捕らえられ、難負人として土餅を背負わされ白刃で追われることになった。それで、難負人として捕らえられないように、人々は家の中に籠もって身を隠していたという。それほど、天下の災厄を背負わされる難負人になることが恐れられた時代があった。したがって、『尾張名所図会』の記された19世紀頃には、この神事はすでに追難の意味合いが強い行事になっていたと考えられる。

しかしながら、国府宮の難追神事が難を追い払うための神事（追難）であっても、国府宮で初春（正月十三日）の神事としておこなわれ、社僧両寺は国内神名帳を読み上げるなどの関わりを持ち続けていたのである。

## V. 難負人・神男の二面性

ところで、難を背負って追われる「難負人」は、一方で現在は「神男」と呼ばれる存在でもある。もっとも、神男と呼ばれるようになったのは昭和年代になってからであるというが、それは難負人が「神男」と呼ばれるような性格を持ち合わせていたからであろう。

鉄鉾会長の犬野氏に伺った話によると、神男に決まると身体を清め、神事の3日前から国府宮の難追殿でお籠もりをする。参拝者の災いを追い払う神男となるための精進をするのである。こうした神男のような役目を担う人が精進潔斎する事例は、兵庫県姫路市（播磨国）の八正寺の鬼会式でも見られる。八正寺の場合、鬼役は公民館に1週間籠もり、毎朝海まで行って海水で身を清め、精進潔斎をした。鬼役は厳しい精進潔斎をすることで、人々から災いを追い祓う力を持ったオニ（赤鬼・青鬼）になることができたのである<sup>17)</sup>。

国府宮でも神男は3日前から儺追殿でお籠もりをし、精進をおこなっている。その期間中は神男が参拝者にお加持をおこなう力を持つのである。人々は厄除け祈願のために神男にお加持をしてもらう。参拝者はお加持の順番を待って行列を作る。鉄鉦会会長の大野氏によれば、神男はこの神事の期間だけは神様みたいな存在であるという。そして、一般の参拝者は厄除けのお守りである「なおいぎれ」を、儺追神事（はだか祭）に参加した裸男にも触ってもらう姿が見られる。これは儺追神事に参加した裸男に神男の力が及ぶものとも考えたからに他ならない。

先に紹介した兵庫県姫路市の八正寺の鬼会式でも、この神男と裸男の関係を見ることができる。薬師堂の前に設置された舞台に赤鬼と青鬼が現れる。この時、花道を通して舞台上がる。ところが、赤鬼と青鬼が舞台上がる前に40分以上もかけて、大勢の人々（旧中村地区）により「鬼のお面箱取り」がおこなわれる。鬼のお面箱をすぐに舞台上げてはならないとされ、四方八方から引っ張られ、何度も後方へと押し戻される。お面箱を押し戻す人々の数も段々減らされて、やっとのことで鬼のお面箱が舞台上がると、鬼のお面箱の後ろをついて来ていた赤鬼と青鬼も舞台上がることのできる。しかし、赤鬼と青鬼は舞台を三周すると、すぐさま薬師堂の中へと姿を消してしまう。したがって、鬼のお面箱の動きといい、なかなか人前に現れない鬼の動きといい、八正寺の赤鬼や青鬼は本来、人前に現れるものではなかったのである。そして、その鬼に災いを追い払う力があると人々は信じ、信仰されたのである。八正寺では仏の化身と考えられる鬼であった。

また、佐賀県竹崎島の修正会鬼祭でも、竹崎島の鬼は島をひっくり返すほどの恐ろしい力を持つとされ、鬼箱からは決して出されていない<sup>18)</sup>。それでも竹崎観世音寺の修正会の結願日には、鬼箱は鬼副によって堂外に持ち出される。それを大勢の若者が必死になって止めるので、鬼箱（鬼副）と若者との激しい揉み合いになる。やっとのことで本堂の周囲を鬼箱（鬼副）が3周まわると、本堂の中へ鬼箱は納められる。その力ある鬼を祀ることにより、竹崎島や諫早の平穏無事を願ったと考える。そうすると、国府宮の神男は、兵庫県の八正寺の鬼会式で考えると鬼のお面箱（赤鬼・青鬼）にあたる存在であり、佐賀県の竹崎島の修正会鬼祭で考えれば鬼箱（鬼箱に封じ込められた鬼）のような存在であったということになる。

愛知県の国府宮で真夜中（午前3時頃）におこなわれる夜儺追神事では祝詞の後、土餅と人形を背負わされた儺負人の頭上で、神職が司宮神の木箱を3回まわした。このことから夜儺追神事の中で、儺を背負った儺負人（神男）と司宮神とは関与がみられる。それから、鉄鉦役（禰宜）だけが太鼓を鳴らして「オー」と声を出しながら庁舎の周りを3周まわった。そして4周目になるところで、儺（土餅）を背負わされ両脇を抱えられた儺負人が先にたち、すぐ後ろに鉄鉦役が続いて庁舎をまわり始めた。この時、鉄鉦役の持つ太鼓は絶えず鳴らされ続けた。暗い庁舎での儺負人の存在を太鼓は知らせ続けたのである。そして、最後の周（6周目）をまわる時、儺負人が背負う土餅に向けて参拝者から礫が投げられた。つまり、国府宮の夜儺追神事において、

神男は天下の災厄が込められた「土餅」を背負わされることで儼を負わされることになり、「儼負人」になった。儼を込めた恐ろしい土餅であるからこそ、神社から持ち出された土餅を埋める場所を知られてはならなかったことも当然といえる。もし土餅を掘り返されでもすれば、たちまち天下の災厄が世に出回ることになってしまう。このように儼（天下の災厄）が込められた土餅は、『尾張名所図会』に「土餅封神事つちのもちひふうじのしんじ（同（正月）十一日午刻、神主宅にてこれをなす。神秘にして外に知る人なし）」とあるように、土餅封神事は神秘にして他見を許されるものではなかった。言いかえれば、それ程の土餅を背負うことができる力を持ち合わせたのが儼負人であった。人々を代表して儼負人は儼を受け、しかもそれを追い払ったのである。

一方、儼負人は土餅という儼を背負わされているので、夜儼追神事で大鳴鈴に追われているともいわれる。しかしながら、鈴は神の来臨を示すものである。兵庫県（播磨国）の鬼追い行事では、円教寺（兵庫県姫路市）の鬼追い会式で赤鬼・青鬼が真っ暗な内陣に現れる時、絶えず振って鳴らし続ける赤鬼の鈴の音がオニの存在を知らせている。

ここから国府宮でも庁舎で儼負人が現れる際に大鳴鈴が鳴らされていることに注意させられる。神男は大鳴鈴によってその存在を知らされたとも考えられるからである。ところが、それが国府宮では追儼の性格を持ち合わせたことで、儼負人は土餅を持って境内から追い出される（儼追）ようになり、しかも抜刀の中で追われるような存在になったのではなかろうか。

## VI. おわりに

愛知県の国府宮では旧暦正月十三日に「儼追神事」がおこなわれていた。現在でも旧暦正月十三日に儼追神事（はだか祭）があり、続いて旧暦正月十四日（午前3時頃）に夜儼追神事がおこなわれている。この時期はちょうど日本中の寺院で正月の仏事（修正会）が修される時期である。『塩尻拾遺』に記される兵庫県（播磨国）の八徳山八葉寺でも修正会が修され、その結願日にあたる正月七日に「鬼追い」がおこなわれている。赤鬼と青鬼は地を強く踏み鎮めて災いを追い払うと考えられている。このように八葉寺（兵庫県）の鬼追いは、寺院の修正会との結びつきを持ち、赤鬼や青鬼には人々の災いを追い払う力がある（仏の化身）と考えられてきた。また、先に紹介した佐賀県の竹崎島でも、修正会の結願に鬼祭がおこなわれた。鬼箱が人々の前に持ち出されて鬼がなだめられ、再び鬼箱の鬼は本堂に封じ込められてきた。

旧暦正月十三日におこなわれる国府宮の儼追神事も、江戸時代に記された『尾張名所図会』などの説明によると、儼追神事のために探してきた難負人を難負殿に入れたことが記されていた。この難負殿というのが、「大日堂なほひどう 儼追堂ともいひて、真言宗、長野村万徳寺の末寺なり。これ当社の神宮寺なり（後略）」と記されるように、国府宮の神宮寺であったというのである<sup>19)</sup>。すると、旧暦正月十三日に執りおこなわれた国府宮の儼追神事には、かつて神宮寺などが関わっていたことになる。そして、儼追神事のおこなわれた場所が、かつての政所（現在の庁舎）であった



という。たしかに、江戸時代の地誌の記された頃には、儺追神事はもとは「吉祥天悔過」であったとされる。したがって、正月に修される国府宮の儺追神事もまた、正月に修される寺院の仏事であったと考えられる。

さて、儺追神事では儺負人は神男とも称され、厄除け祈願のために大勢の参拝者からお加持を求められる。この神事の間だけ、神男は神様みたいな存在であるという。このような神男が、国府宮の夜儺追神事において、儺（天下の災厄）を込めた土餅を背負わされて儺負人となり、大鳴鈴が鳴らされて庁舎から追放されることになった。しかし、儺負人は国府宮の儺を背負うという大役をつとめることのできる存在であった。真夜中の夜儺追神事では大鳴鈴がしきりに鳴らされ、大鳴鈴が儺負人または神男の来臨を知らせるのである。そうすると、国府宮の夜儺追神事（修正会）が儺を追い払うということを重視した時点で、神男は追放される存在になっていったということになる。

儺負人が庁舎から追われる時に、儺負人に向かって礫が投げられた。仮にその礫が厄除けのために儺負人へと投げられるものとするならば、礫の灰までもすぐさま処分されるのが望ましく思われる。しかしながら、礫を焼いた灰はわざわざ翌年まで置かれ、翌年の土餅を作る時に餅に混ぜられるのである。この点については今後検討したい。

## 謝辞

本稿は、日本民俗学会第62回年会（平成22年10月3日、於東北大学）、御影史学研究会第42回年会（平成22年12月23日、於兵庫県会館）において研究発表をし、そこでご教示いただいた内容をふまえ、加筆修正したものです。本稿を作成するにあたり、尾張大國霊神社の竹内正憲氏・山脇敏夫氏・森澤氏、鉄鉦会の大野善光氏にはお忙しい中、数々のご教示を賜りました。また神事当日は、尾張大國霊神社・鉄鉦会・明治奉賛会など大勢の皆様方からもご教示をいただき、本当にご親切にいただきました。現地調査には神戸女子大学名誉教授田中久夫先生がご同行くださり、ご指導をいただきました。御影史学研究会理事の中村慶太氏には資料を度々ご教示いただきました。ここに記し、お世話になりました多くの皆様に心より厚くお礼申し上げます。

## 引用文献、註

- 1) 『新修 稲沢市史』本文編上（新修稲沢市史編纂会事務局、平成2年11月刊、573頁）。また、『尾張大國霊神社史』（尾張大國霊神社社務所、昭和13年3月刊）、『尾張大國霊神社史料』（尾張大國霊神社、昭和52年11月刊）、『稲沢市史』（稲沢市役所、昭和43年11月刊）、『新修 稲沢市史』研究編5 社会生活（新修稲沢市史編纂会事務局、昭和58年3月刊）、『稲沢の年中行事』（『稲沢市史』資料編第31編、稲沢市教育委員会、平成8年3月刊）、『尾張志』中島郡編（愛知博文社、明治25年7月刊。ブックショップ「マイタウン」、平成11年2月刊）参照のこと。

- 2) 『塩尻拾遺』(『日本随筆大成』第3期 17、吉川弘文館、昭和53年1月刊、272頁)。『塩尻』は天野信景著、江戸時代中期の随筆である。国府宮(尾張大國霊神社)について『塩尻』(『日本随筆大成』第3期 13、吉川弘文館、昭和52年9月刊、359頁)には、「中島郡尾張大國霊神社〔割註〕国府宮也。」正月追儼はもと浮屠脩正の法也。茅にて小人形を多くつくりて儼を撃、其人形を小形と称す、〔割註〕別に大形ありて儼に負する也。」(後略)」と記されている。
- 3) 口頭発表「八葉寺の鬼追いと修正会」(日本民俗学会第61回年会研究発表、平成21年10月4日、於國學院大學)。
- 4) 国府宮の儼追神事の日程は次のとおりである。旧暦正月二日「儼追神事標柱建式」儼負人(神男)選定式、旧暦正月六日「大鏡餅米洗」、旧暦正月七日「大鏡餅搗」、旧暦正月十日「儼負人(神男)参籠」、旧暦正月十一日「土餅搗神事並秘符認」「大鏡餅飾付」、旧暦正月十二日「大鏡餅奉納」「庁舎神事」、旧暦正月十三日「儼追神事(はだか祭)」、旧暦正月十四日「夜儼追神事」「清祓式」、旧暦正月十七日「的射神事」。
- 5) 奉賛会の方に向った話(平成23年2月15日調査)によると、巨大な大鏡餅を奉納する奉賛会は、地域の立候補制となっている。地域が一手に受け、地域の有志の人々(奉賛会)が大鏡餅をお供えする。大鏡餅の奉納には巨額な費用が必要となる。旧暦正月七日に大鏡餅の餅搗きがあり、大鏡餅で50俵ある。国府宮の拝殿には、大鏡餅を奉納した地域の名が記された駒札が掲げられている。平成23年(2011)は明治奉賛会が大鏡餅を奉納した。平成23年2月9日(午前5時に開始)に大鏡餅の餅搗きがおこなわれ、2月14日に大鏡餅の奉納行列があった。大鏡餅はきれいに飾り付けられたトラックに載せて参道まで運ばれた。大鏡餅の上には、ようかんで作ったダイダイをのせ、伊勢えび・昆布・干柿などを飾りつける。大鏡餅を拝殿に奉納する時は、重量があるため人力ではできず、クレーンで吊り下げて拝殿に移動する。昭和30年を過ぎてからだったと思うが、大鏡餅が次第に大きくなっていった(平成22年9月調査)。この大鏡餅の他に、小餅(鏡餅)の奉納が近隣の諸地域から多数ある。ただし、小餅(鏡餅)といいながらも、人の手で運ぶのは難しい大きさ(5俵)である。なお、大鏡餅奉納奉賛会の沿革について、『大鏡餅奉納行事記念誌』(春日井市奉賛会、昭和56年8月刊)には、「地元中島郡の13町村を一巡し31年から中島郡以外からも奉納を受けることにした。但し、受け手のない年は必ず地元で引受けることを条件とした。又30年までは、はだか祭り当日の午前中に奉納していたが、これを契機として31年からは前日に奉納することに歴史的な転換をおこなったものである」とある。
- 6) なおい筐につける奉納布は、縦45cm・横30cm程の布で、筐に付けて奉納する。向った話(平成23年2月14日調査)によると、奉納した布は本来、手洗鉢の所で皆さんに使ってもらおう手拭などにしたものであるという。
- 7) 『「国府宮裸まつり」構成の持続と変化』(國學院大學日本文化研究所、平成3年3月刊、55~58頁)。また、庁舎について『「国府宮裸まつり」構成の持続と変化』(前掲書、38頁)には、「儼追殿に参籠していた神男が初めて参列する神事、それがこの庁舎神事である。庁舎というのは神社境内東南隅に立てられている仮屋同様の建物であり、儼追神事と例大祭・巳代神事(梅酒盛神事ともいう)のみに使用されている。(中略)庁舎神事に先だって、先ず司宮神社から司宮神の遷座が行なわれる。庁舎周辺は鬱蒼と樹木が生い茂り、昼でも薄暗い所である。提灯の明りのほか頼るものない暗闇の中で司宮神社の扉が開かれ、納めてあった司宮神の箱が取り出された。司宮神の箱は、禰宜の振り鳴らす大鳴鈴に先導されて庁舎に入り、庁舎の西北隅の神棚に安置された」とある。一方、旧暦正月十三日の「儼追神事」は、江戸時代末頃から始まったものとされている。本来は夜儼追神事が主であった。

- 8) 『国府宮裸まつり』構成の持続と変化』(註(7)前掲書、58頁)。また、庁舎での夜籠追神事について、鉄鉢会会長の<sup>大野氏</sup>に伺った話によると、「庁舎での神事では、神男に礫を投げて、厄を落とす。この礫はすぐに灰にして、それを来年の籠追神事まで置いておき、来年の土餅の中に礫の灰を混ぜる。礫は今年の厄がこぼれたという感じがする。そのため、2年続けてのお祭りだと思ってもらったらよいと思う」という(平成22年9月調査)。
- 9) くじには一番くじ、二番くじがある。一番くじをひいて神男に選ばれてから万が一、喪にかかってしまったり何かあった場合のことを考え、控えである二番くじの人を決めておく。神男に決まると、真剣に取り組まないといけない。自分の家では家の風呂で水をかぶって身を清める。また、朝晩10kmぐらい走り続ける。たとえ5分でも10分でも、自分の踏ん張れる時間を作らないといけない。くじで神男にあたらなかった人は、翌年まで鍛錬をおこなったりしている(平成22年9月調査)。
- 10) 神男に「なおいぎれ」をさわってもらったり、布をさいてもらったりする。布をさいいただくことで、厄をさくという意味がある。また、中村慶太氏のご教示(祖父江町)によると、国府宮の籠追神事の期間にいただいてきた「なおいぎれ」は、自転車のハンドルや自動車の車内に結びつけておく。「なおいぎれ」には、国府宮(神社)のものと、籠追神事(はだか祭)に参加した裸男からいただいたものがあるという。
- 11) 『新修稲沢市史』資料編9 近世 寺社 下(新修稲沢市史編纂会事務局、昭和60年3月刊、336頁)。
- 12) 『張州府志』(『愛知県郷土資料叢書』第19集、愛知県郷土資料刊行会、昭和49年10月刊、535頁)。
- 13) 『張州年中行事鈔』(『名古屋叢書』3編第8巻、名古屋市教育委員会、昭和57年3月刊、85頁)。
- 14) 『尾張名所図会』(『日本名所風俗図会』6 東海の巻、角川書店、昭和59年10月刊、310~314頁)。また、「尾張<sup>を</sup>大国<sup>は</sup>霊<sup>を</sup>神社<sup>に</sup>(国府宮村にあり)『延喜神名式』に尾張<sup>を</sup>大国<sup>は</sup>霊<sup>を</sup>神社、『本国帳』に従一位尾張<sup>を</sup>大国<sup>は</sup>霊<sup>を</sup>大神<sup>と</sup>しるせり。今は国府宮<sup>を</sup>総社<sup>と</sup>大明神<sup>と</sup>と称し奉る」とある。
- 15) 『尾張名所図会』(註(14)前掲書、314頁)。また『尾張名所図会』には、「社僧<sup>いとくいん</sup>威徳院(真言宗、長野村万徳寺末。(中略)また当寺に所蔵の『本国神名帳』は、元龜二年正月十四日の奥書ありて、世に「国府宮本」と称し、日本なるが、元禄年中天野信景修補して納めぬ。今正月難追祭に読むはこの国帳なり)」とあり、正月難追祭に読む国帳は社僧威徳院の所蔵であったことがわかる。一方、難負人を捕えた時は、捕えた印として難負風が吹いたという。
- 16) 『稲沢市史』(稲沢市役所、昭和43年11月刊、358頁)には「この政所は梅酒盛神事を執行するので、梅森社ともいった。これを明治十一年(一八七八)二月十八日付で庁舎と改名するように地引帳改正願を県令へ提出し、同年三月四日付で許可になった」と説明している。「国府宮村」(『新修 稲沢市史』資料編五 地誌 下、新修稲沢市史編纂会事務局、昭和63年10月刊、153~154頁)「寛文村々覚書」の項には、「一 政所 長式拾六間・横八間 前々除。本社より辰巳之方別所、於此所仮屋建、正月十三日・五月六日、祭礼執行」とあり、本社の辰巳の方に仮屋を建てるとある。現在、夜籠追神事がおこなわれる庁舎もまた、柱と屋根のみで壁のない状態である。一方、『尾張名所図会』(註(14)前掲書、310頁)には、「司宮神仮面一(正月の祭礼に政所に出だす。猿田彦の面とも称して、社家<sup>やから</sup>の輩<sup>を</sup>殊<sup>に</sup>に尊崇す(後略)」とあり、正月の祭禮に司宮神の仮面が出されているとある。同書には「司<sup>つかさのみやのかみのやしろ</sup>宮<sup>さるだひこのみこと</sup>神社(猿田彦命をまつる)」との記載がある。さらに、この司宮神について、『張州府志』(愛知県郷土資料刊行会、昭和49年10月刊、534頁)には、「司宮神假面一枚。正月之祭禮出<sup>政所</sup>。社家<sup>やから</sup>尤恐<sup>を</sup>此面。蓋類<sup>を</sup>方相魁頭面。吾國王舞之假面也。江州佐々木神社自<sup>古</sup>有<sup>假面</sup>。祝<sup>を</sup>禱<sup>を</sup>水<sup>を</sup>早<sup>を</sup>者<sup>を</sup>似<sup>を</sup>之。意。古籠追之日。所<sup>を</sup>捕<sup>を</sup>路<sup>を</sup>人<sup>を</sup>蒙<sup>を</sup>此面。爲<sup>を</sup>籠<sup>を</sup>鬼<sup>を</sup>歟。今頗破壊。故徒爲<sup>を</sup>神<sup>を</sup>實<sup>を</sup>耳。」と記されている。現在、庁舎でおこなわれる夜

儺追神事でも司宮神の神棚がまつられる。そして、夜儺追神事で土餅（儺負人）に投げた礫の灰はその場で焼かれ、司宮神の神棚に納められるという。このように、司宮神と夜儺追神事は深い関連性を持つ。

- 17) 拙稿「八正寺と鬼会式—「鬼のお面箱取り」をめぐる—」（『久里』20、神戸女子民俗学会、平成19年4月刊）。
- 18) 拙稿「竹崎島の修正会鬼祭—満潮に二匹の鬼が呼びあうこと—」（『御影史学論集』第34号、御影史学研究会、平成21年10月刊）。
- 19) 『尾張名所図会』（註（14）前掲書、314頁）。また、兵庫県姫路市の松原八幡神社でおこなわれていたとされる鬼会式は、明治の神仏分離によって神宮寺である八正寺で鬼会式が継承され、現在でも八正寺で鬼会式がおこなわれている。「播州松原山八幡宮縁起」（『兵庫県史』資料編中世4、兵庫県、平成元年3月）には、「又從<sub>レ</sub>正月朔日一七箇日間行<sub>ス</sub>修正会<sub>ヲ</sub>、出<sub>レ</sub>座<sub>ヲ</sub>神前<sub>ニ</sub>祈<sub>リ</sub>天下泰平・万民豊樂<sub>ノ</sub>由<sub>ヲ</sub>、自<sub>レ</sub>二月朔日<sub>ニ</sub>至<sub>ルマテ</sub>于一七箇日名<sub>ニ</sub>鬼会<sub>ト</sub>、覆<sub>キ</sub>青赤二面鬼形<sub>ヲ</sub>二人潔齋<sub>メ</sub>、出<sub>テ</sub>八幡宮拜殿<sub>ニ</sub>嚴<sub>ク</sub>花<sub>ヲ</sub>行道<sub>ス</sub>、僧中各祈<sub>ル</sub>五穀成就政<sub>ヲ</sub>」とある。一方、兵庫県姫路市の魚吹八幡神社では、明治の神仏分離以後も鬼追いは魚吹八幡神社でおこなわれている。したがって、国府宮の儺追神事は魚吹八幡神社の事例にあたるといえる。